

報 告

アメリカ留学報告記 第3報 同時多発テロ 9.11

聖隷浜松病院 てんかん科

山本 貴道

その日から4年の月日が経過した。

2001年9月11日、New York University (NYU) Medical Center 内の教育病院である New York VA Hospital^(注1)での手術のため定刻に OR (Operating Room) に入った。患者は51歳の黒人男性。上肢に放散する痛みと筋力低下で頸椎のMRIを撮ったところ、第5頸椎と第6頸椎の間で椎間板ヘルニアが生じ脊髄が著しく圧排されていたケースである。気管支ファイバースコープで誘導しながら頸椎を伸展することなく気管内挿管がなされた。術中透視用のC-armを入れ、頸部を軽く牽引し頸椎前方固定術のためのポジションをとった。

注1：純然たる私立のNYU Medical Centerに日本で言うところの国立病院であるNew York VA (Veterans Administration) Hospitalがあるのは奇異に映るかもしれないが、アメリカでは一つのメディカルセンター内に私立と国公立が混在するのは珍しいことではなく、医学生やレジデント・フェローのための教育にとってそのような国公立の施設は極めて重要な役割を果たしている。全米にあるVA Hospitalsはアメリカ合衆国大統領によって統括され、中でも最高の評価を受けるNew York VA Hospitalはブッシュ大統領から直接電話がかかってくる。

午前7時30分、執刀。前頸部に切開を加え、頸椎に向かって剥離を進めた。目標とする椎体間に達し、椎間板を摘出。ドリルを使って椎体間を拡げていった。

午前9時前、いつも冗談ばかり言う麻酔科の女医が興奮した様子で入ってきた。

“Hey, guys! Two airplanes crashed into the Twin Towers.”

皆彼女の方をチラッと向いたが誰一人反応しない。

またいつもの冗談かとお互い目を合わせてニヤッとして、また黙々と手術を続けた。彼女はドアを激しく閉めて出て行ってしまった。

またしばらくして、

“Some airplanes are still missing. One of them is targeting the Sears Tower in Chicago.”

Sears Towerというのはシカゴのミシガン湖畔にそびえ立つ超高層ビルである。どうやら今日はいつもの冗談とは違うらしい。だが誰も手を止めて聞くわけでもない。皆どう反応して良いのかわからない感じだ。

ヘルニアを起こしていた椎間板は摘出され、椎体間には十分な余裕ができた。その空間には移植骨がはめ込まれるが、アメリカではbone bankというのがあり、人から集められた様々な骨が処理された後、製品化されている。適切なサイズの骨を選び、更にbone sawやドリルを使って微細に大きさを調節する。移植骨を椎間に埋め込んだ。

午前10時30分過ぎ、その麻酔科の女医は見たこともないような沈鬱な様子で、

“The Twin Towers have collapsed. This must be terrorism.”

ここでやっと我々は事態が尋常でない、とんでもない現実に関与しつづけるのを理解した。間もなくNYU Medical Centerの脳神経外科主任教授室から電話がかかり、現在進行中の手術を可及的に早く終了すること、その後に予定されている手術は全てキャンセルし、予想される多数の外傷患者に対応するため手術室を全室空けて待てという指示がなされた。

手術はまだ終わっていない。我々は焦りだした。

透視用の C-arm を見ながら先程埋め込んだ移植骨を覆うようにチタン性のプレートをスクリューで固定した。ドレーンを留置し閉創に入った。創を閉じるまでやけに長く感じた。手術終了。患者は麻酔から迅速に覚醒し ICU に運ばれて行った。

すぐに手術室の廊下に出た。窓から First Avenue を見下ろすと映画でしか見たことのないような光景が目飛び込んできた。車は大渋滞で、その間を縫うようにすごい数の群衆がマンハッタンの北に向かって歩いている。地下鉄は全て止まっていた。南の方角を見ると既に Twin Tower の姿はなく大きな黒煙だけが見えた。自分の足が小刻みに震えているのが分った。家族のことが心配になり携帯で電話をかけた。幸いつながった。家族は TV Japan というチャンネルで NHK の“ニュース10”を見ていたので、私よりも事実を把握していた。お互いの無事を確認しオフィスにもどった。New York VA Hospital のオフィスからはマンハッタンの東岸を走る Franklin D. Roosevelt (FDR) Drive やイーストリバーが一望できたが、既にその時点で FDR Drive には1台の車も走っていなかった。マンハッタンの中にテロリストがいると考えられたため、マンハッタンとその周辺を結ぶ橋やトンネルは全て閉鎖されていた。マンハッタン内の道路は南北方向を走る avenue は通行できたが、東西方向の street は多くのブロックが置かれ通り抜けは不可能であった。

NYU Medical Center は World Trade Center の現場から直線で4km 程度離れていた。数時間待機したのだろうか。救急患者は運ばれては来なかった。スタッフの何人かは現場により近いところにある分院の NYU Downtown Hospital に応援に行った。結局テロから数日以内に NYU Medical Center で手術に至ったケースは数人程度だった。ほとんどが現場で命を落としたからである。

緊急手術など何かあれば病院にもどるということになり、とりあえず自宅に帰ってよいと主任教授から許可が下りた。ところがスタッフの中で私だけがマンハッタンの外に住んでいた。ハドソン

川を渡ることはまず不可能であった。同僚の一人が、部屋が一つ空いているので泊っていけと言ってくれた。もう少し待って本当に帰れそうもなければお願いすると言って別れた。しばらく呆然としながらオフィスに一人が残っていた。実はその時の噂では、テロリストは World Trade Center の次は大きな医療機関を狙うだろうと言われていた。そこに人々が殺到すると予想したからだろう。ここにも飛行機が飛んでくるのかと恐怖に怯え、時々窓から上空をのぞいていた。

ラジオを流しっぱなしにして交通情報を聞いていた。幸運にも自分が毎日通勤で使っている George Washington Bridge だけが開通したらしい。午後3時を過ぎた頃だった。すぐにオフィスを出て駐車場に向かった。病院内は当直医師や勤務中のナース、事務系職員の一部以外はほとんど帰ってしまい閑散としていた。中古のカムリにエンジンをかけ走り出した。警官が所々に立っている。ブロックで通り抜けできない道路が多く、何度か street を変えた。やっとマンハッタンの西岸にたどり着き West Side Highway に乗った。道路はすいていた。思わず笑みがこぼれたが、5分も走らない内に大渋滞の列の最後尾についた。橋の入り口で車線規制があったためだ。バックミラーには倒壊した Twin Tower の黒煙が風にたなびいて映っている。こんな時は得体の知れない何かに追いかけているような気がしてくる。気の短い人達は皆で一斉にバックしようなどともんでもないことを言い合っている。高速道路の大渋滞で車が全体で後方に進むなど前代未聞だ。結局その周りにいた人々は賛同せず、言い出した人は自分の車に引き返した。しかしながら、いつもなら20分くらいで自宅まで着く距離を3時間もかかってしまった。自宅にようやくたどり着き家族の顔を見た途端、一気に緊張から開放された。日本からいくつかメールが届いていた。すぐに心配してくれていた人達や自分の両親に電話をかけた。また自分自身は Twin Tower 倒壊の瞬間を見たわけではなかった。そこでじっくりとテレビに見入った。

翌朝、やはりマンハッタンに入るルートは全て

閉鎖されていた。橋の近くまで行ってみたが、入れないのはすぐにわかり自宅にもどった。病院に電話をかけると近くに住んでいるスタッフは徒歩なので病院に来ていた。申し訳ないが出勤できないことを告げると、その日手術が予定されている患者も来ていないので手術はキャンセルとなり問題ないとのことだった。テロの後しばらくは手術のキャンセルが相次いだ。患者やその家族がマンハッタンに来ることを怖がったからだ。テロから3日目には出勤できたが、手術もなくやることがないため午前中で帰宅することが多かった。それとは裏腹に病院の外壁は行方不明の人々の写真で埋め尽くされ“Wall of Prayers”（祈りの壁）と呼ばれた。写真を貼るための濃いブルーのボードが病院で用意され、写真とボードの数は日に日に増える一方であった。花やキャンドルが添えられ、昼夜を問わず多くの人々が集まり皆情報をさがしていた。

結局業務が正常に復したのは1週間位経ってからだった。病院の出入り口では患者のみならず病院のスタッフまで全て身分証明証（ID）をチェックされた。テロ以前から New York VA Hospital ではセキュリティが厳しかった。以前患者が銃で

医師を襲った事件があったからだ。それでも医師は病院の ID さえ見せれば、空港の出発ロビーでのセキュリティ・チェックで行われるような X 線透視手荷物検査装置にバッグを通したり、金属探知機を通過したりする必要はなかった。ところがテロの後には医師を含めて病院スタッフ全員が手荷物検査をされ金属探知機を通ることになった。朝病院の玄関では出勤してきた職員が長蛇の列を作り、脳神経外科のオフィスに行くまで一苦労だった。大学病院の Tisch Hospital でも患者、その家族、見舞客、病院スタッフ全員が玄関ホールで ID をチェックされた。病院スタッフ以外は免許証などの ID をチェックされた後、記名をして院内に入るのを許された。主要なドアは至る所でロックされ、ID カードの読取り機を通さないと入ることができなくなった。

テロを境にアメリカ社会は変わった。毎朝通勤で通る George Washington Bridge では自動小銃を小脇に抱えた多くの州兵が常駐するようになり、不審な車や積載内容に疑いがもたれるトレーラーは全て止められて中を調べられた。橋もテロの格好の標的と言われていたからだ。空港でのセキュリティ・チェックは常軌を逸し、多くの乗客が搭



地下の再開発が急ピッチで進んでいる。

テロ以前は地下鉄の駅から続く巨大なショッピングモールを形成していた。

乗時刻までにチェックインできないのは珍しいことではなくなった。しかしここまでやってもテロを未然に防ぐことは容易ではないらしい。ニューヨーク近郊の LaGuardia International Airport では、セキュリティが有効に機能しているか FBI が抜き打ちで調査を行った。銃を隠し持った FBI の捜査官がどこまでその銃を発見されずに乗客に混じって機内に入れるのか試みたのだが、結局機内で座席に着くまで係員達が銃を見つけることはできなかった。その後もアメリカ国内を家族と飛行機で旅行することが何度あったがやはり緊張した。おそらく今でもそう感じることだろう。

Twin Tower が倒壊した場所には大きなクレーターができ爆心地を意味する Ground Zero (グランド・ゼロ) と呼ばれた。以来ニューヨークへの観光客が最初に立ち寄りところとなった。しかし私も家族も、またニューヨークに長年住んでいる人達もすぐには Ground Zero には足が向かなかった。2001年の倒壊以後、私が初めてそこに足を踏み入れたのは2003年の春だった。別に Ground Zero に最初から行こうと思っていたわけではない。その頃は臨床から離れニューヨーク大学ワグ

ナー公共政策大学院で医療政策と医療管理学を学んでいたが、調査で近くまで来ていたからだ。ふとその場に行く気になった。既に再開発が始まっていた。また犠牲者2,749名の全ての名前が“The Heroes of September 11, 2001”として掲げられていた。今では地下鉄が Ground Zero まで開通し、World Trade Center の復興が更に進んでいる。

私がアメリカに入国したのは1998年だったが、できるだけ永くアメリカに居ようと考えていた。そのためビザもグリーンカードへの変更が可能なものを取得していた。しかしこの同時多発テロを身近に体験した後、日本への帰国に大きく傾いたのは明らかだった。それでも私はニューヨークが好きだ。再びアメリカに住むのなら、やはり同じ場所に住みたい。ニューヨークで学んだことや経験が、善かれ悪しかれ、今ある自分の礎となっているからだ。天を突く摩天楼。緑深いセントラルパーク。陽気なニューヨーカー達。激しく変化し続けるニューヨークに如何に象徴的な World Trade Center が再興されるのか興味は尽きない。

今回はアメリカの大学院教育についてレポートする。



倒壊した現場を取り囲むようにフェンスが張られ星条旗の下には多くの犠牲者の氏名が掲げられている。